

十一月の太陽がアスファルトにまぶしく照り返していた。影をまとった濃淡のはっきりした家並みがやけに新鮮に思えた。二十年以上同じ場所に住んでいるのに近所の道をほとんど知らないのも、たまには違う道を歩いてみようと思つてふらつと家を出た。風もないので少し歩くと汗ばむほどの陽気だった。日曜の午後の静けさも新鮮だった。

下田岩夫、五十歳。中堅の電子機器メーカーの技術者として主に納入先からの修理修繕業務にあたつていた。納入先は全国にわたつていているのに営業所が少ないため泊まりの出張が多くなる。先方へ出向いて二、三日。帰つてくるとまたすぐ他へ呼び出されて二、三日。仕事はそんな繰り返しだった。

こんな道もあつたんだなと思つて歩いていると道端の草むらが光った。その光が横目に入つてきて岩夫は足を止めた。キーンと突き刺すような一瞬の輝きだった。なんだろうと草むらをのぞき込むと、金色の細いチェーンがまあるく横たわつていた。これが光つたのだ。捨てられたものに違いなかつたが岩夫はなぜかそれを無視することができなかった。

草むらに足を踏み入れてチェーンを手にとってみると、意外にも片方が何かにつながつていて重みと共に黒いシオルダーバッグが釣り上げられた。新品のようなきれいな状態だった。見るからに高そうなバッグだったが全体がやけに膨らんでいるので品がない。

ファスナーを引いてみると中からタオルがうつつと飛び出してきた。無理矢理詰め込まれたのだろう。息苦しさから解放されたようにタオルはもこもこ動いている。

タオルを抜き取ると中に入っているものが目に飛び込んできた。紙帯のされたものがみつつ。いかにも札束らしい。岩夫は慌ててファスナーを閉じ、バッグを持ったまま草むらの奥へ進んだ。茂みが激しくなつたあたりで足を止め、振り返る。歩道からは死角になつていゝ。再びファスナーを引いて中をのぞき込んだ。そして帯のひとつをつまみ上げた。

やはり一万円札の束だった。ばらばらと中身を確かめる。本物だ。

岩夫はさらに茂みの奥へと進み、太陽の光が届かないところまでやってきた。そこで再度バッグの中をのぞき込んだ。確かに札束がみつつ入つていた。他にはポケットティッシュと女性物のハンカチが一枚だけ。財布も携帯電話も鍵もない。外出するための用意としては簡単すぎる。持ち主が分かるようなものは何もなかった。

よし。

今だとばかりに岩夫は三百万円をわしづかみにして一気に抜き取ると、素早くジャケットの内ポケットに押し込んだ。そしてその場にしゃがみ込み、三百万を抱きしめるように背中を丸めて息を殺した。

もういいだろうと立ち上がるまでしばらく時間がかかった。立ち上がつてみると回りは意外にも明るくて岩夫は戸惑つた。札束がなくなつたバッグは高級感を失い、安っぽい入れ

物に成り下がっていた。岩夫はチェーンをバッグの中へ入れ、チャックを閉めてタオルもろとも茂みのなるだけ奥の方へ水平に投げ入れた。バッグが太い幹にぶち当たって落ちるのを確認した。

草むらから歩道へ出ると体がこわばった。早くこの場から立ち去りたかったが家には戻りたくなかった。家に戻っても妻の育代がいるだけだ。育代とは最近会話が減っている。話し込むことがないのだ。「ああ」「うん」「OK」。何を聞かれても返事はそれだけで十分だったし、こちらから話しかけても「そうね」「分かったわ」「分かってます」これぐらいしか返って来ない。話題がなくなっても「そうね」「分かったわ」「分かってます」これぐらいしか四月に働き出してから休日もほとんど家にいなくなった。朝早くから夜遅くまでいたい何をしているのやら。二十代の頃は自分もそうだった。それが若さというものだ。だから詮索しない。あさりと育代以上に会話がなかった。というより顔を合わせることも少なくなっている。たまに三人そろって食事する時があるとテレビの音が大きく聞こえる。あさはひとり勝手に笑っている。育代は食べるのがやけに早い。いつも岩夫が最後までゆっくり食べている。

「あしたからまた出張なんだ」「そう」「台風が来るからややこしいんだ」「来てるわね」「日程が変わるかもしれない」「いいわよ別に」

自動音声に従ってしゃべっているようだ。結局家にもつまらない。だから今日も外へ出たのだ。

岩夫はジャケットの上から左胸を押さえた。内ポケットには三百万円が入っている。今までの自分とは違う。それを強く意識した。何度も後ろを振り返り、誰もいないことを確かめる。早足になったり急に角を曲がったりしてその都度後ろを確かめる。道の片側に草むらが続いている間は放り投げたバッグのことが頭から離れなかった。

ふと前を歩くひとりの男に気がついた。おやっと思った。それでようやく気がまぎれた。自分に似ている。

自分の後ろ姿を確かめたことはなかったが、男の背中を意識した瞬間、自分もおそらくこんな風に歩いてるんじゃないかと思ったのだ。みすぼらしい後ろ姿。そこに引つ掛かった。関節の痛みをこらえるようなぎこちない足取り。ふっくらとした腹回り。右へ左へとゆらゆら揺れる背中。うつむき加減の頭。立ち止まった時だけ顔を上げ、すぐにまたうつむく。そうだな、そうするしかなかったんだよなと確認しているようだ。

年恰好も自分に近かった。デニムのズボンに厚手のジャケット。手ぶら。杖をついた方がいいんじゃないかと思えるぐらいに弱々しい。悩み事でもありそうだ。

気が付けばしばらく後をつけていた。とっくに草むらは消えて閑静な高級住宅街に入っていた。どの家にも車二台分のガレージがあった。広い庭があり、きれいに剪定された木々が歩道に影を落としていた。道はゆるやかにカーブしていたので良い具合に目隠しになっていた。靴音も響かなかった。

それにしてもこの男は高級住宅街には不似合いだ。まさか住人ではないだろう。自分と同じ通りすがりの者だろう。そう確信していたが、男がある邸宅の前で立ち止まったのでどきどきとした。するとすぐガレージのシャッターが開いて真っ赤なスポーツカーが出てきた。運転席からは光り物をちりばめた薄着の若い女が降りてきて男に微笑みかける。男もまた微笑み返して女と入れ替わりに運転席に座る。女が助手席へ回ると車は瞬時に加速して音もなく去っていく。ガレージのシャッターが自動で閉まり出す。それは一瞬の出来事だった。

岩夫は裏切られた気分だった。自分に似ているという印象だけでここまで後を付けてきたのだったが、余計に情をかけていたようだ。みすぼらしく歩いてきた男が実は金持ちの紳士だったと思いたくなかった。スポーツカーに若い女を乗せて走り去ったことが腹立たしい。後を付けてきた自分が情けなくなつた。

しかし岩夫は微笑んだ。男が女に向けた顔と同じようないやらしい顔になって微笑んだ。そうだ、自分には三百万円がある。

ジャケットのポケットに手をつ込んで札束を握りしめた。

駅を出て北へまっすぐ歩いたら神社があるからそのとなりの細長いマンションよ。五分くらいかな。

由利恵はそう言った。ウインクをしながら。

由利恵との出会いは管理職育成セミナー。これから管理職になろうとする者を対象にした合同企業研修で、由利恵はキャリアアドバイザーという肩書きで講師を務めていた。セミナー自体よりその後の懇親会の方が長くそこで由利恵と親しくなり、その後も由利恵が講師を務めるセミナーに自費で参加するようになった。キャリアアップよりも由利恵と親しくなりたかったのだ。細身のパンツスーツ姿でマイク片手に講演する由利恵の姿は格好良かった。よく通る声でよどみなくしゃべる姿には人気があった。懇親会の場でも由利恵はよくしゃべった。すぐに忘れてしまいたいようなたわいもない話ばかりだったが、岩夫にはそれが心地よかった。無理に話を合わせなくてもいい。「うんうん」「あはは」「へえー」という相づちを打つだけで十分だった。何より由利恵のウインクに引かれた。目が合うと必ずウインクしてくる。それに気づいた時は舞い上がった。自分にだけウインクしてくる。そう思い込むと由利恵の瞳から目が離れなくなった。顔全体ではなく瞳だけに集中する。パチツと音の出るような右目のウインクが由利恵のすべてだった。

そのマンションはすぐに見つかった。セキユリティーを解いてもらうため入り口の前で「着いた」とラインした。約束の時間通りだった。返信がないので電話してみると、あらほんとに来たのねと驚かれた。

まあいいわ、入って。

ロックが解除されてドアが開いた。エントランスホールは殺風景だった。冷たい空気の中に靴音が大きく響いた。エレベーターが降りてくる間にスマホが鳴り出したが由利恵からだ確認しただけで応答はしなかった。

八〇二号室。ノックが合図と言っていたのでその通り二回ノックすると勢いよくドアが開いた。

「早く入って」

由利恵はとても慌てている様子だった。

入るとすぐロックされてチェーンがかけられた。岩夫は戸惑った。由利恵が来てよ来てよというからやってきたのだ。昼間ならOKよというから昼間にやってきたのだ。なのに歓迎されていない。招かざる客のような扱いだ。知り合って間がないのに由利恵の方から積極的に誘ってきた。岩夫は舞い上がった。妻以外の女と付き合うのは始めてだったから。何度か食事をした。酒も飲んだ。それくらいの付き合いだった。

由利恵は着替えの途中のブラウス姿を拒むように背中を向け、リビングで待っててと言っただけで玄関に近い部屋へ入っていった。

突き当りのリビングはかなり大きく、日当たりがよくて明るかった。贅沢な暮らしぶりがうかがえる。しかし岩夫は首をかしげた。ショールームのように感じたのだ。真新しい家具や電化製品が図面通りに収められていて快適な居住空間を演出している。生活感がなくて冷たい。どこかに荷物を置いたらそれが邪魔物として瞬時に消えてしまいそんなプラッシャーを感じる。

「何もないでしょう」

遠くの部屋から由利恵の声が聞こえた。

「ジャケットはソファーにでもかけておいて」

それは恐ろしかった。ジャケットの内ポケットには三百万円が入っているのだ。どこに隠しておこうかと迷っているうちにどこにも隠せなくなってあの時のままずっと内ポケットに入っている。秘密の口座を作ろうと思っただけで取り引きのない銀行へ行ってみただけで、ジャケットのポケットから三百万を抜き取ることができなかった。金額欄に三百万を記入しようとした途端めまいがして息苦しくなったのだ。なので外出する時は必ずこのジャケットを着なければならなくなった。危ないのは分かっているが家のクローゼットに吊るしておくのもっと危ない。育代は時々家の中を大掃除する。俺の部屋へ入ってきて遠慮なく物を移動させる。きれいな女だと思っただけで結婚してからはしばらくの間だけだ。今では大いなるおせっかいでしかない。

岩夫は恐る恐るジャケットを脱いでソファーにかけ、自分は突っ立ったまま由利恵が出てくるのを待っていたが、だいぶたってもその気配がないので「おーい、まだかーい」と呼びかけた。

「待たせてるわね」

「いや、いいんだけど」

「座ってて」

ソファ―に腰を下ろそうとした時、由利恵が出てきた。仕事用のスーツに着替えていた。岩夫にはそれが見慣れた由利恵の姿だった。ふたりで食事をするようになっても由利恵は常にスーツ姿だった。普段着の由利恵を見たことがなかった。

「これから仕事なの？」

岩夫は尋ねた。予定があるとは聞いていない。

「この格好でないと人と会えないのよ。これがあたしの普段着なの」

由利恵は外で食事をしましょうと言った。来てよと誘ったくせに家の中を見られるのが嫌そうだった。

岩夫は何やら胸騒ぎを覚えた。これまでより由利恵が気取っているように感じたのだ。歩くスピードがゆっくりだったし話し方もゆっくりだった。「ふふふ」「そうね」「やっぱりね」とひとり言をつぶやいてひとり納得している。わざと低い声を出して注意を引こうとしているようにも思えた。役者がセリフの確認をしているようだ。

マンションからほど近いこじやれたイタリアンレストランに入った。なじみの店らしい。個室に案内された。

席に座るなり由利恵は切り出した。

「車が欲しいのよ」

「は？」

「あたし車が欲しいのよ」

由利恵の顔力に押されて水を一杯口にしようとしたがまだ運ばれていなかった。

由利恵の顔が怖かった。獲物を見つけた時の獣の顔をしている。

「欲しいのよ」

「まあひとまず料理を頼もうか」

「料理なんかいらぬの。車が欲しいのよ」

もう岩夫は分かっていた。由利恵は車をおねだりしている。車を。

不意にジャケットの胸ポケットがざわついた。三百万円がうふふと笑ったのだ。

岩夫は慌てて胸を押さえた。苦しいとばかりに。

「あ、いや、ドライブには興味がないんだ」

「あたしは大好きよ」

「初耳だな」

「初めて言ったわ」

ウインクが飛んできた。自分にだけのウインクだ。苦しくなっただけの胸が心地よくしびれてくる。不思議だ。

今日の前に由利恵がいる。イタリアンレストランの個室だ。由利恵の方から誘ってきた。自分は選ばれし人だ。車が欲しいと言っている。自分は選ばれし人だ。ここはきちんと返事しなければいけない。自分は選ばれし人だ。

よし！ と叫ぼうとした時、店員が注文を取りに来た。

男が目の前を歩いていった。この前よりもみすばらしい姿で明らかに元気がなかった。腰に手を当て、右へ左へとふらふらしながら歩いている。黄土色のマフラーが余計に年寄りくさい。

再びあの男を目撃するとは思わなかった。興奮すると同時にねたみがこみ上げてきた。この前のことを思い出す。貧乏くさい格好をしながらも高級住宅街で真っ赤なスポーツカーに若い女を乗せて颯爽と走り去っていった。見た目は俺と同じ冴えない中年男だ。取り柄もなければ体力もないはずだ。ぼんやりと毎日を過ごしているだけだろう。向上心もなければ夢もない。ないないづくしの中年男。なのに高級住宅街、真っ赤なスポーツカー、若い女。岩夫はこの日も男のリズムに合わせて歩いた。前かがみの姿勢も体の揺らし方も真似してしばらく後をつけた。

気がつくとも見慣れない道に出ている。道というよりそこは街だった。ターミナル駅。駅の二階からは何本もの遊歩道が伸びていて高層マンションにつながっている。百貨店があり総合病院があり大学があり、芝の行き届いた公園もあった。色鮮やかな電子広告がさつと広告を変えると新しい景色が生まれる。夜のネオンのけばけばしさではない。洗練された都会の明るさだ。

この場所にも男はやはり不似合いだった。陰気くさくて貧乏くさくて病弱そうで頼りない。異物混入だ。しかしながら自然と溶け込んでいるようにも思えた。なじみのバーにすーと入って気取らずカクテルを飲んでいるような。

男の足が止まった。ズボンのポケットから財布らしいものを取り出してなにやら確認している。そして目の前の総合病院へ入っていった。

①初診、②一般外来、③会計、④精算。たくさんの窓口が並んでいる中を男は素通りして自動受付機の前に立つ。カードを入れる。細長い紙が出てくるとそれを引き抜いてエスカレーターに乗る。よそ見をせず、引き抜いた紙を確認することもない。どうやら男はなじみらしい。

岩夫は幸いこれまで大きな病気をしたことがなかったので総合病院の中の様子を知らなかった。こんなにたくさんの人がいるのかと驚いた。歩いている人も多いし座っている人も多い。ぎゅうぎゅう詰めに座っているので椅子が見えない。座る場所がないので立っている人も多い。

男は二階のカウンターですばやく受け付けを済ますと採血の場所まで一直線に進み、受付で渡されたファイルを置いて壁に背もたれした。順番を気にする様子もなく、片足をぶらぶらさせながらスマホをのぞいている。

岩夫は男がだんだんと元気になっていくように思えた。と同時に腹が立ってきた。病院へ入っていった時はよしっと思っただのだ。こいつは病人だ。豪邸に住んでいても病人だ。スポーツカーに若い女を乗せていても病人だ。気の毒な病人だ。そんな風に情をかけて満足していた。しかし今男はリラックスしている。スマホに向かって笑いかけている。

採血を済ませた男は左腕の針のあとを押さえながら地下まで下りていき、レントゲンを撮ったあと再び二階へ戻って検査病棟から診察病棟へ移動していった。

岩夫はますます腹を立てた。男の足取りが軽いのだ。今まで大病をしたことがない自分の方が不健康に思えてくる。

呼吸器内科、循環器内科、消化器内科、血液内科、腎臓内科、糖尿病内科。

診察病棟も人であふれていた。どの科も診察が遅れているようだったが、男は時間を気にする様子もなく今度は文庫本を読み始めた。

斜めうしろから男を観察していた岩夫の方が退屈した。こういう展開になるとは思っていなかったから何の準備もしてきていない。たいがい場合はスマホがあれば時間がつぶせるのだが、充電残量が5%になっていたので無駄遣いは出来ない。案の定眠くなる。回りの雑音を聞くともなく聞いていると……。

甘い香水の香りで我に返った。

光り物をまとった若い女がヒールの音を響かせてやってくるのが見えた。香水はその女からだった。女は岩夫の前方を通り過ぎ、文庫本を読んでいるあの男の前で立ち止まった。

「うふふ」と笑いかける。男も笑顔を返す。

「まだなの？」

「ああ」

声は聞こえなかったが、岩夫は頭の中で瞬時にそう文字化した。またしてもあの男にあの若い女だ。身に着けているものはみんな高級品に違いない。化粧品、時計、バッグ、靴。真っ赤なスポーツカーが似合いそうだ。

女は男の耳元で何やらささやいたあと、広い待ち合いを見回して岩夫に目を付けた。そしてつかつかと歩き出す。当たりくじを引いたのはあなたですよというように岩夫に近づいてくる。

「あのう、申し訳ありませんが」

香水のかたまりが岩夫の鼻腔をえぐった。

「いきなりで申し訳ありませんが、よかったら父の隣に座っていただけませんか？」

「父？」

「はい、あそこにいるのが父なんです」

岩夫は指さされた男を見た。いままでずっと見続けていたが改めて見据えた。

「ぼかんとしている岩夫に女は続けて言った。

「このところずっと元気がないんです。それで父と同じような感じの人だったらなぐさめになるんじゃないかと思って声をかけさせていただきました。あ、ごめんなさい。気を悪くされたら謝ります」

立ち上がるべきか断るべきか。岩夫は固まっていた。背中を向けている男が遠慮気味に頭を下げたような気がした。

「父はプライドが高く、人に頭を下げるのが大嫌いなんです。自分より強い人には絶対近づかないんです。だから元気な人はだめなんです。すぐに喧嘩になるんです。弱々しい人ではないと話し相手にならないんです。自慢話がしたいんです。自慢話を聞いてやってください」娘はそう語気を強めた。

まったくばかにしたような頼みごとだったが岩夫は承諾してしまった。香水に惑わされたのかもしれない。

岩夫が男の隣に腰を下ろすと娘はさっと背中を向け、かん高いヒールの音を響かせて遠ざかって行った。

みずぼらしくて病弱で貧乏くさそうな男。

岩夫の思い込みはある程度当たっていたが、大いに外れてもいた。

最近妻を亡くしましてね。それで一気に落ち込んで急性の胃腸炎になりましたね。風邪ひとつ引かなかった体が急に弱ったので娘が心配して話し相手を探してくれて。

と、そこまで話したところで男は突然立ちあがり、思いきり背筋を伸ばして、

「いやいやあなたはいい人だ」と握手を求めてきた。

握手の力は半端ではなかった。あり余る力を見せてるように力任せに握ってくる。

しばらく話を聞いてみると娘の言う通り自慢話のオンパレードだった。上場会社の人事担当でキャリアを積み、四十歳の時に人材派遣の会社を立ち上げて大成功していること。経営相談に乗った会社はすべて成長していること。フルマラソンを五回完走していること。競走馬を三頭持っていること。酒豪であること。シドニーとロサンゼルスに別荘を持っていること。

次から次へと話題を変えて一方的にしゃべってくる。その声は大きくて野太い。ここは病院ですよと注意する間もない。

「お見受けするところあなたはお金に困っているようですね」

ついにはそんなことを言い出した。

「金が必要ななら融通しますよ。二、三百万ならいつもジャケットのポケットに入ってますからね」

そしてふふふと笑う。

岩夫は一気に固まってしまった。忘れようとしていたあの三百万がよみがえってくる。

草むら、黒いバッグ、押し込まれたタオル、三百万、ジャケットの内ポケット、由利恵が車を……。

慌てて腰を上げようとすると強い力で肩を押さえつけられた。

その時男の名前が呼ばれた。顔が反応した。

「私はどこも悪くない。昨日だって日本酒五号と焼酎だ」

再び男の名前が呼ばれた。

「あなたが代わりに診てもらいなさい。見たところ元気がない。どこか悪いでしょう。さつきからうつむいてばかりだ。どこが悪いか言いましょうか。胸です。胸に穴が開いておる」



男は座っていたソファを指さし、ここで待ってなさいよと言って消化器内科五番診察室へ入っていった。

岩夫は席を立たなかった。いや、立てなかった。あなたの胸ポケットには穴が開いておる。そこから三百万が抜け落ちた。可哀想な人だ。そう言われた気がして金縛りにあった。すべてを見透かされているように思えたのだ。草むらで三百万を拾ったこと。由利恵に車をねだられたこと。すぐに買ってやったこと。自分の愚かさのすべてを。

まもなく男は堂々とした態度で診察室から出てきた。もはやみすばらしくて頼りなくて貧乏くさい男ではない。パワフルな実業家。山気のある投資家。じゃぶじゃぶの資産家だ。

「私がね、今一番力を入れているのは企業人のキャリアアップなんだよ」

岩夫の隣に座り直してさらにしゃべり続けようとするので、岩夫は立ち上がって移動を促した。

精算を済ませて病院を出たものの、どこまでこの男の言うことを聞いていればいいのかわからなかった。出来ればもう縁を切りたかったがキャリアアップという言葉が妙に引っかかる。企業人のキャリアアップとはつまり管理職育成セミナー。由利恵が講師を務めているセミナーがそれだ。

「企業人のキャリアアップといえば例えば管理職育成セミナーみたいなものですか」

岩夫は思っていることをそのまま口にした。

「ほほう、よく御存じですな」

男はうれしそうに応じた。

自分もその種のセミナーに参加しているなどと言えどもくさいことになると思ったので岩夫は、同僚が参加してその女性講師といい仲になっているとごまかした。

「ははは、よくある話だ」

「よくありますか」

「その手の話はよく聞きますな。たいがいは男の方が入れあげて金を使わされるんですな。男の方が貢ぐんですな。講師の女は化粧がうまくて口も達者だ。スーツを着こなして立ち振る舞いも見事なもんだ。講演のあとの懇親会ではもてますわな。それでうぶな男が引っ掛かる。マンションに来てよなんて言われてうかうか行ったりすればもう相手の思うつぼ。あなたはい人。素敵大好き。あれが欲しいの、これが欲しいの。これでさんざん貢がされるんですな。それで貢がされた男がその後どうなるかといえば」

歩きながら聞いていたらターミナル駅の中央改札まで来ていた。電車に乗ろうとしたわけではない。かといってこのまま歩き続けるつもりもない。公園のベンチが開いていたので一番暖かそうな場所に座ることにした。

岩夫は話の続きを聞きたかった。さんざん貢がされた男はその後どうなるのか。

しかし男は話題を変えた。碁や将棋はやるのかと聞いてきた。やらないと答えると、ゴルフはやるのかと聞いてきた。それもやらないと答えると今度はジムやサウナで汗を流すの

かと聞いてくる。どれにも首を振っているうちに自分は趣味のないつまらない人間だと思わされているようで無性に腹が立ってきた。

男はポケットからジッポを取り出し、一度炎を確認してから、煙草は？ と聞いてきた。見せびらかしているのだ。吸いますと答えたらふたつみつ持つてるからどうぞと言うに違いない。

岩夫は再び首を振った。

「そうか、なにもやらないのか。それじゃ女の方もだめみたいだな。あなた、気を付けなさいよ。あなたみたいな人が危ないんだ。気が優しくてまじめで時間を持って余しているあなたみたいな男がセミナー講師の女に引っ掛かりやすいんだな。さんざん貢いだあと男はみんな」

張り巡らされた電子広告がいつせいに消えて駅周辺が暗く沈み込んだ。

由利恵は時速百キロで走り続けていた。この調子なら目的の温泉地まであっという間に着くだろう。納車されたばかりの真っ白な車は車高が低くてまるで高速道路を滑っているような感覚だった。

車が欲しいのよという由利恵のおねだりはすぐに満たされた。運よく岩夫のポケットに三百万円が入っていたから。草むらで拾った三百万だ。納車までが早かったので、年末の温泉旅行に間に合った。

「本当にいいの？」

すべての手続きが終わってから由利恵は確かめてきた。

「君が喜んでくれるなら」

岩夫は格好よく答えたものの、内心はほっとしていた。内ポケットの中の三百万円がなくなったことで肩の荷が下りたのだ。あのジャケットを着るたびに胸が締め付けられていた。常にジャケットのことが頭から離れなかった。これで解放された。どうせ拾った金だ。一氣に使って正解だ。事情を知らない由利恵には何の罪もなかったが、三百万の車を買って与えたことで犯罪者意識を共有することができた。その一体感がうれしかった。

旅館の駐車場に停められた真っ白な車はカキーンと冴えわたっていた。すぐに温泉へ入りたかったが由利恵が散策を望んだので岩夫は付き合うことにした。

岩夫は由利恵の真意をつかみかねていた。車を買う約束をしたあとで「高速を走りたいの」「ゆっくり温泉につかりたいの」と言ってきたが、これで満足するかどうかは分からない。さらにエスカレーターして「クルーズ船に乗りたいの」「ヨーロッパを回りたいの」「高層階のマンションが欲しいの」と言ってくるかもしれない。今回は三百万で収まってよかったが次はもうない。ガソリン代も節約したいくらいだ。しかし由利恵に疑問を抱くと必ずウインクが飛んでくる。こちらの気持ちを見透かすかのように右目のウインクが飛んでくる。そうなるかと岩夫は手も足も出なかった。メロメロになるばかりだった。

今日も相変わらずのスーツ姿だった。温泉地でキャリアアップの講演でもするつもりなのか。替えのスーツも用意している。

「意外と寒くないわね」

由利恵はハーフコートを脱いで腕にかけた。

「そうだな」

と岩夫もジャンパーを脱いでみたがやはり寒かった。ジャンパーの下はジャケット。しかしあのジャケットではない。内ポケットに三百万入っていたあのジャケットは三百万がなくなつた途端に忌まわしいものに成り下がり、見るのも嫌になつたのでさっさと捨てた。すると今度は由利恵にプレゼントした真っ白な車が呪いのかたまりに思えてきた。三百万円の呪縛は収まっていない。

溪谷からは白い水が飛び散っていた。シャーシャーと滝の音が聞こえる。この場所が一番のおすすめスポットだった。大勢のカップルが見に来ていた。

一泊二日の外泊なら理由はいくらでも考えられた。妻の育代には仕事半分遊び半分だと言っておいた。何度か出張している先の名前を口にしたが特に反応はない。そんなものはいちいち覚えているわけもない。名前を出すだけ不自然だった。温泉に浸かってから帰つてくると言つても「分かつたわ」。もうだいたい前から作業着の洗濯が出張の合図になってわざわざ声をかける必要もなかったがこの時は出張だと口にしてしまった。やはり普段通りには過ごせなかった。あのジャケットのことも自分から口にした。

「ポケットが破れたんだ」

「それで捨てたのね」

「ああ」

「でもわざわざ切り刻まなくてもいいじゃない。証拠隠滅みたいに」

「ははは、証拠隠滅か」

これだけのやりとりで終わってほっとした。証拠隠滅とはなかなか鋭い。切り刻まなければよかった。でもそうしなければ気が済まなかった。金輪際思い出さくないから切り刻んだのだったが、かえって頭の中に焼き付いてしまった。

滝は一本の太い帯だった。退屈な白さだった。ふたりは同時に退屈した。目と目を合わせずうなずき合つて滝を離れた。ひよっとしてこういうところがいいのかもしれないと岩夫は思った。気持ちを確かめ合うこともなく、深く立ち入ることもなく、勝手気ままに付き合っている。

部屋へ戻つても由利恵は温泉へ入ろうとしなかった。着替えることもしなかった。パソコンを開いてなにやら打ち込んでいる。時々「ギヤー」と叫び声を上げる。この「ギヤー」は講演のあとの懇親会の場で連発されていた。おもしろいことにも「ギヤー」。分からないことにも「ギヤー」。恥ずかしいことにも「ギヤー」。堅苦しい講演のあとだけにそのギャップが驚きでもあつたし、由利恵の魅力でもあつた。

「腹減つたなあ」

岩夫は次の展開を促した。

「お腹減ったわよね」

由利恵はかわいらしい声を出してパソコンを閉じた。

もう夕飯の用意はできているはずだ。食堂へ行けば刺身の舟盛りが食べられる。おいしい地酒が飲める。ほろ酔い気分温泉に浸かれる。

「ちよつとそこに座って」

由利恵は居間の大きなテーブルを指さして言った。その声が岩夫にはとても重く響いた。何事もてきばきとこなす由利恵の姿は美しかったが、たまにその美しさとは正反対の重苦しい態度に出ることがあった。あの時もそうだった。初めて由利恵のマンションへ行った時、部屋を出てイタリアンレストランへ向かう途中の由利恵の歩き方が重苦しかった。「ふふふ」「そうね」「やっぱりね」というひとり言も地味で演技がかっているようにも思えた。何やら胸騒ぎがしたのを思い出した。その胸騒ぎは的中して車を買与えることになったのだ。「座ったよ」

岩夫はにこにこして正座した。わざとおどけたのはあの時と同じ胸騒ぎがしたからだ。かなり身構えていた。

向かいに座った由利恵の目はかっと見開いていた。車が欲しいのよと言ってきた時以上にパリパリの顔がズームアップしてくる。

「子供が欲しいのよ」

それは低い声だった。

「あたし、子供が欲しいのよ」

さらに低い声で繰り返した。たましいを乗っ取った後の憑き物の声だった。

パリパリの由利恵の顔がひび割れていく。ひびの間から湯けむりが立つ。

ウインクがない。ウインクがない。

真っ白な車が滝の中へ突っ込んでこっぴみじん砕け散った。

セミナーへは行かなくなった。会社へは異動を申し出た。だめだったら辞めるとまで言った。

育代には無になると宣言した。

「無になるって何よ」

「無だよ」

「ふうん、分かったわ」

「そうか。分かってくれたか」

「ええ。あなたがおかしくなりかけてるのが分かったわ」

育代はそれ以上取り合わなかった。岩夫は落胆した。久しぶりに育代と話が出来ると思っていたのに盛り上がらない。無になると言ったのがいけなかったのだ。もっと具体的に言わなければならぬ。

買い物に出かけるといふ育代を捕まえてもう一度話しかけた。

「俺は今日から左利きになるぞ」

「ふうん」

「左手で箸を持つ」

「どうぞ」

「歯磨きも左手でやる」

「分かったわ」

「ペンも左手、スマホも左手。シャツのボタンも靴ひもも全部左手だ」

「それって何かのおまじないなの？」

「おおそうだ、その通り。厄払いのおまじないだ」

しまったと思った。厄払いと口にして体が硬くなった、縁を切ろうとしている由利恵の姿が目の前に浮かんだ。ねっちょりとからみついてくる。

慌てて首を振るとこみ上げてくるものがあつた。

「フアイヤー！」

岩夫は叫んでいた。叫び終わってから叫んだことに気がついた。頭の前からロケットが飛び出していく。しかし不思議なことに憑き物が取れたようなすっきりとした気分にもなっていた。

この調子でもう一度叫んでやろうと思ったが、すでに平常心に戻っていたので恥ずかしくてできなかった。

目の前の育代が話しかけてくる。

「何のお芝居か知らないけど変なものに巻き込まないでね」

真面目な顔で。

左利き宣言をしてから岩夫はすぐさま実行に移した。習慣づけようと思ってまずは毎朝の歯磨きから始めてみたものの、左手がまっすぐ動かない。歯ブラシが歯茎を直撃して痛いばかりだ。右手も一緒に動いていた。何も持っていない右手が歯ブラシを握った形で正しい動きを示している。こうやって磨くのだと教えているようだ。我慢して左手で磨いているうちに何度もえずいて疲れ切ってしまった。血も出ていたので歯磨き粉と一緒に吐き出そうとしたら激しくえずいて涙が出た。

何者かが背後から見張っているような気がする。

「フアイヤー」と叫んでいた。叫ぼうと思って叫んだのではない。こみ上げてくるものが「フアイヤー」になってしまったのだ。鏡の中の自分は貧相で年寄りくさい顔をしていた。

背後の何者かはその後ままとわりついた。常に見張られているような気がする。どこにいても何をしても。

夕飯に鍋が出てくることが多くなった。鍋は育代の好みだ。ダシはしょうゆだれに決まっている。

多くなったといっても育代とあさりの間だけで食べることも多く、自分は残ったものを翌日の晩ごはんにあてがわれていた。それはそれでうまかった。でも物足りなかった。やはりつつくものだ。いろいろ話をしながらつついてこそ鍋だ。

「やあやあ今日はどんな具合かな」

岩夫は思いつきり弾んだ声でこの日の鍋をのぞき込んだ。豆腐、白菜、しいたけ、つくね、サケ、タラ、ホタテ。ダシが見えないぐらいに盛り上がっている。缶ビールを開けグラスに注ごうとして手を止めた。おっといけない。左手を使うんだった。

左手で缶を持ちグラスにゆっくりと注いでいく。うまい具合に泡が立った。これくらいは簡単なことだ。

軽くのどを潤してから箸立てに左手を伸ばす。自分用の箸を抜き取ったものの握り損ねて二本とも落としてしまった。テーブルを転げて床へ落ちていく。

拾い上げるのは右手だった。慌てた時はやはり利き手が出る。改めて左手で箸を握ってみたが形にならない。一本一本がクロスして行儀よく並んでくれない。力を入れると余計に乱れ、力を抜くと指から抜け落ちた。右手にも力が入っていた。握り拳を作って左手にエールを送っている。

それでも岩夫はがんばった。なんとか形を作って鍋の中に箸を突っ込み、サケをつまみ上げようとするがサケは泳いで逃げていく。箸で追いかける。逃げる。追いかける。逃げる。鍋の中をぐるっと一周追いかける。

「やめてー！」

育代が叫んだ。

「汚いー！」

あさりも叫んだ。

すぐにお玉を手渡されたのでそれを左手に持って慎重にサケをすくった。

結局肩が凝っただけだった。途中で右手に変えたものの何を食べているのか分からないぐらい味気ない食事だった。育代とあさりはいつも通りにぎやかにしゃべっていたが時折冷たい視線を送っていた。岩夫もそれを意識していた。

こみ上げてくるものがあつた。しかし、ファイヤーは出なかった。

縁を切ろうと思ったのに由利恵のことが気になって仕方がない。

「子供が欲しいのよ」

このひと言がからみついている。

あの旅館では何も起こらなかった。岩夫は警戒していたが、由利恵から誘ってくることはなかった。夕飯の刺身に舌鼓を打ち、辛口の地酒に酔って気分よく温泉に浸かった。さすがに由利恵も夜までは仕事をしなかった。

翌朝岩夫が目を覚ますと由利恵はすでに新しいスーツを着てパソコンを開いていた。特に変わった様子はなかった。

もう一度滝を見に行き、その他の名所も回って昼過ぎに帰途についた。由利恵は最近セミナー受講者が集まらないので企業への営業活動に時間を取られるのだとしきりにぼやいていた。スーツを買い過ぎてマンシヨンのひと部屋がスーツ部屋になっている、キャリア外国人の向上心には圧倒される、正しい日本語と通じる日本語の違い、そんなことを自分勝手にしゃべり続けていた。車の話は出なかった。行きも帰りも由利恵が運転したが、三百万の新車に興奮することもなく、乗り慣れた様子でハンドルを握っていた。素敵！ ありがとう！と歓声を上げたのは納車時の一回きりで、それから後は一度も感謝の気持ちを表さなかった。

もう一度マンシヨンを訪ねてみようか。

岩夫は首を振った。歓迎されないのは分かっている。あの日も本当に来たの？ と戸惑った様子ですぐに外へ出た。そしてイタリアンレストランで車をねだられた。

ライン、メール、電話、手紙。

すべてに首を振った。直接会わなければ意味がない。

そもそも縁を切ろうと思ったのはあの男が妙なことを言ったからだだった。セミナー講師の女には気を付ける。さんさん貢いで捨てられる。家庭崩壊、人間離脱。ご苦労さん、さようなら。

岩夫は猛烈に首を振った。振れば振るほど時間が逆戻りしていく。

白い車が滝の中からバックで飛び出してきてそのまま暴走を始めた。こじやれたイタリアンレストランの前で止まる。スーツを着た女が獣の顔で言う。「欲しいのよ」。三百万がジャケットのポケットに戻される。と思ったらその三百万は黒いシヨルダーバッグの中へ収められ、上からタオルが押し込まれた。バッグはばんばんに張っている。草むらがある。何か光るものがある。散歩の途中だった。

こみ上げてくるものがあった。

ファイヤー！